



第38回学部祭「富桜祭」



第19号

平成元年3月15日
静岡県三島市文教町2
日本大学三島同窓会発行



平成の時代を迎えて

平成元年度三島同窓会長

中嶋信行

昭和の時代が終り、平成の時代となりま。平成元年は、明治二十二年日本大学が創立されて百周年を迎える年であります。このような記念すべき時に三島同窓会長に選ばれたことを、大変光栄に感じて居ります。尚その責任の重さを思う時、会員の皆さんの御協力なくしては、その責任を務める事が出来ませんので、皆様の御協力を切にお願い申し上げます。

これから日本の日本は、国際社会の重要な位置にあります。幸い、三島に、日本大学国際関係学部が設立されました事は、これからの日本が国際社会に進出し、重要な役割を務めなければならぬ事を見通したような時に、設立された事に感服致しております。しかし、国際関係学部の学生の皆さんだけでなく、三島学園に学ぶ学生の皆さんも、日本国内だけでなく、大きな視野を持って、世界的な立場で国際感覚を学んで頂きたいと思ひます。そして国際感覚から日本を見直し、尚自分を見直す事が、国際感覚の向上につながる事だと思います。

昭和二十三年三島予科に入学した私ですが、現在の様に国際社会に日本の位置づけが出来るとは思つてもみませんでした。敗戦国として、国際社会の片隅で、いじけた生き方をしなければならないのではないかと思われた時代でした。日本の国は勿論、日本全国総貧乏、そんな時代に九州の福岡県の田舎から三島校舎に入学したのです。

その当時、鹿児島本線の久留米駅から汽車に乗って門司で乗り換なければ本州に直行する汽車はなかつたのです。沼津に着く迄の所要時間は、四十二時間を要しました。駅弁等勿論ありません。家を出る時、梅干を入れた握飯を五

でなく、三島学園に学ぶ学生の皆さんも、日本国内だけでなく、大きな視野を持って、世界的な立場で国際感覚を学んで頂きたいと思ひます。そして国際感覚から日本を見直し、尚自分を見直す事が、国際感覚の向上につながる事だと思います。

昭和二十三年三島予科に入学した私ですが、現在の様に国際社会に日本の位置づけが出来るとは思つてもみませんでした。敗戦国として、国際社会の片隅で、いじけた生き方をしなければならないのではないかと思われた時代でした。日本の国は勿論、日本全国総貧乏、そんな時代に九州の福岡県の田舎から三島校舎に入学したのです。

その当時、鹿児島本線の久留米駅から汽車に乗って門司で乗り換

えなければ本州に直行する汽車はなかつたのです。沼津に着く迄の所要時間は、四十二時間を要しました。駅弁等勿論ありません。家を出る時、梅干を入れた握飯を五

食分持つて来るのですが、沼津に着く頃になると握飯が匂つてくるのです。然し、匂つた握飯を食わざるをえませんでした。今日の飽食の時代からは考えも想像も出来ない事でしよう。

しかし良く勉強しました。他人の知識を自分のものにし、自分を少しでも向上させようと意欲に燃えたデスクカッティングで夜が明ける事も度々ありました。デカルトだからだルソーだと口角泡をとばして語り明かしたあの頃が、懐かしく思い出されます。青春そのものでした。何かを求める、何かを得る事に貪欲でした。追求と云う言葉がピッタリの学生生活でした。追求しない者は、何も手にする事が出来ません。何も得る事が出来ません。

当時の三島学園の先生方は、皆学生の仲間に入つてこられたのか、我々学生が先生方を仲間に引き入れたのか、先生と学生の間が、教室以外で、非常に親密な関係にありました。学校の授業以外に多くの個人授業を受けたものです。

楽しい思い出がたくさんあるのが三島学園の生活でした。尚、腹をすかした空腹の思い出も三島でした。同じ釜の飯を喰つたと実感の友達がたくさんあるのも三島の学生生活の仲間達です。

在校生の学生の皆さん達も、友人を、先生を、また同窓会の先輩達を肥しとして、人間形成に役立てて下さい。そして、国際人として飛躍される事と、良き三島の同窓会員となられる事を念願致しますので、皆様の御支援と御協力を重ねてお願い申し上げます。

富士は変らず



日本大学三島同窓会
会長 西村美枝子

一期同窓会に出席して

一期 高橋捨造

ております。

三島に待望の国際関係学部が発足して十年が経過しました。この

私が日大三島予科の初めての女子学生として、胸をときめかせ乍ら満開の桜の校門をくぐり、秀麗富士を仰いでから四十有余年が過ぎました。

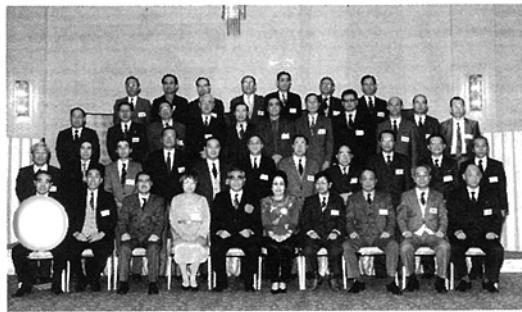
この四十有余年をして今も、希望にあふれた若者達が同じように校門をくぐります。

私の三島時代は、未だ太平洋戦争終戦後の混乱の時代で、様々な理由から三島予科だけで終られた方、又三島も中途で退学された方も多くおられました。

私達の同窓会はこうした方々を含め、三島で学び、遊んだ共通の思い出を持つ人達で構成され、現在会員数も八万人になろうとしております。

キャンパスも立派な教室や諸施設が完備され、旧陸軍兵舎を利用した草創の頃の面影を残すものは極く僅かになりました。

然し、私達が同じ学び舎の窓から眺めた秀麗富士の姿は、変わることなく今日も亦明日も暖かくそして厳しく私達の学園を見守っています。



日大三島一期同窓会 行われる

平成元年二月十八日(土)午後五時から、東京文京区の名渕会館で、沼尻副総長をお迎えして三島一期同窓会が行われました。当日は、四十名の方々が出席されて往時を偲び、和やかな談笑の時を過ごしましたが、出席席のお一人、高橋捨造氏から一文が寄せられました。

朝に玲瓈富士の白雪と箱根の山々を想い、夕べに伊豆の温泉から立ち昇る煙と清流の行方に想いをはせながら騒ぎ、踊り、わけわからぬままに読書した学泉寮のパンカラの友情と郷愁——食べるものがなく栄養失調になり、歩くことさえ困難になつたこともあつた。赤野犬を捕獲にいたこともある。寮の自治管理への斗い。炊事部、文化部での熱気に満ちた活動。箱根遠征、予科祭で自作の「放浪の情熱」を寮生として参加し、出演したこと。演劇部のゴーゴリの「検察官」に協力出演したこと。五所平之助さんの假寓で映画の話をきき、映画監督にならうと決心したこと。三島高女のY子さんが初恋の人だと涙ぐんで告白してくれたこと。最後には学生運動に参加して大学当局からは同窓会は、今後もそのご遺志が受け継がれ更に発展することと信じ

りました。平成の年に三島同窓会が新たに飛躍すること、私達の縁が富士の如く変わることを祈念して止みません。

村美枝子さんよりはじめて同窓会の青春の追憶と懐かしさのあまり新幹線三島駅に下車したときは夜の雨もやんでいました。学生課長の角田さんを頼つて学園に行きました。

兵舎を改造したあの木造の校舎や、学泉寮のあつた付近の面影はどこにもなく、今は落ち着きのある派手な学舎が、調和よく建築され、美しい自然に囲まれた思索の森のなかで、私はただ一人、また降りだした浅春の霧雨のなかでしばし佇んでいたのでした。

朝に玲瓈富士の白雪と箱根の山々を想い、夕べに伊豆の温泉から立ち昇る煙と清流の行方に想いをはせながら騒ぎ、踊り、わけわからぬままに読書した学泉寮のパンカラの友情と郷愁——食べるものがなく栄養失調になり、歩くことさえ困難になつたこともあつた。赤野犬を捕獲にいたこともある。寮の自治管理への斗い。炊事部、文化部での熱気に満ちた活動。箱根遠征、予科祭で自作の「放浪の情熱」を寮生として参加し、出演したこと。演劇部のゴーゴリの「検察官」に協力出演したこと。五所平之助さんの假寓で映画の話をきき、映画監督にならうと決心したこと。三島高女のY子さんが初恋の人だと涙ぐんで告白してくれたこと。最後には学生運動に参加して大学当局からは

好ましからざる人間となり、追われるようにして三島の地を去つたのです。きびしい現実のなかにも、自由と淡いロマンがあつたようになります。

あれからの四十年の人生——幾多の想い出が交錯し、明滅し、走馬燈のように去來したものは、それは儚い泡沫にも似た虚しさであります。また「これでよかつたんだ! わが青春に悔いなし!」と大声で叫んでみたいそれは一種妙な感傷と感動だったのです。

角田さんは初対面の私に「どう忙のなか、いろいろとご配慮いただき、昼食をご馳走になつたり、夕べに伊豆の温泉から立ち昇る煙と清流の行方に想いをはせながら騒ぎ、踊り、わけわからぬままに読書した学泉寮のパンカラの友情と郷愁——食べるものがなく栄養失調になり、歩くことさえ困難になつたこともあつた。赤野犬を捕獲にいたこともある。寮の自治管理への斗い。炊事部、文化部での熱気に満ちた活動。箱根遠征、予科祭で自作の「放浪の情熱」を寮生として参加し、出演したこと。演劇部のゴーゴリの「検察官」に協力出演したこと。五所平之助さんの假寓で映画の話をきき、映画監督にならうと決心したこと。三島高女のY子さんが初恋の人だと涙ぐんで告白してくれたこと。最後には学生運動に参加して大学当局からは

月十九日は、横浜で小学校からの親友N君と逢い、港の見える丘を散策し、中華街の鳳城酒家で、これまで馳走になりながら駄弁り、新幹線の列車のなかの人となつたときは、すでに夕闇が迫っていました。六十年の人生のなかで、日大三島予科時代の僅か二年間の短い青春の体験が、私の今ある人間としての生きざまや人生観、会社経営の面に少なからず影響を与えてくれているのではないかと思うとき、結果的には自分の夢は果たせなかつたけれど、人生の峠を越えて今の生活と、ささやかな幸福に感謝しなければと思う。

「こんなことで青春が終わるか! そんな憤りも激しい空腹でかき消されてしまう何もない時代だつた。女性と接する機会もなかつた——そうした精神的にも肉体的にも飢餓状態にあつた当時は、常に現実への不安と未来への希望が同居していた。すきつ腹だつたけれど、自由とヒマだけはタップリあつていいなあと今でも思う。日本にとつても、つかの間の青春——貴重な時代だつたのではないか。」

昨秋の青春映画「ダウントウンヒローズ」私たちと同年輩の映画監督、山田洋次さんの言葉です。



人はそれらしい家に住む

三 浦 寛 也

(国際関係学部就職指導担当)

上坂冬子さんという人は、なんてけしからんことを書く評論家だろうと思つた。そう思つたのは、次に紹介する朝日新聞(昭和五十年二月八日夕刊)に掲載された上坂さんのエッセイを読んだ時である。

私は何年ぶりかで故郷にゆっ

くり帰ることになった。これまで

もあわただしく親の顔を見には帰つていたけれど、ゆつくり滞在す

るのは五年ぶりくらいだろうか。

故郷は愛知県で、私は終戦後に十

年余り住んで会社づとめをしてい

たから、かの地は青春の思い出と

重なつてゐる。所用があつて車で

元の勤め先のあたりをまわつてみ

ると、青春のころからふた昔を経

た工場地帯はすつかり様相が変り、

山を切りくずしてご時世に合わせ

た持ち家地帯が出来上がつてゐた。

何気なく一巡すると新築の家家の表札にかかれた氏名の大半は、

かゝつて机を並べ、私の記憶に残つ

ている人ばかりではない。あら

ためて見直すうちに思いがけない

ことに気づいた。つまり人々はい

かにもそれらしい家に住んでいる

のである。

その昔、フォーカダンスが職場

にようやく普及はじめたころ、

いち早く導入してサークル活動を

もり上げたために昇進し、かげで

人は、いまや小高い丘の一角に日

当り良し、眺望良しといふ絶好の

場所を占めていた。いっぽう労使

関係の一番こじれた時に社内報

編集を任せられた人は、ついに力づ

きて神經性胃炎で倒れたとか伝え

師はもつと学生諸君と交流を深めるべきだと考へてゐるので、そのような家の作りにした。

予算の関係で調度品までどうか

な、と思つていたら、家内が五〇

〇万円内緒のお金を出してくれた。

それもあつて、予想外に氣に入つた調度品を備えることができた。

現在では、日本でも外の施設で

の交流でなく自宅での交流を深

めてよい時代に入つてゐる。

ここで一つの提案をさせていた

だきたい。

個人の住んでゐる家で、その人

を評価するのは、今でもおかしい

ところである。

個人の住んでゐる家のせいにする

人が住んでゐる家の評価を、そ

の人が住んでゐる家のせいにする

なんて、本当にどうかしていると

思つた。

それから四年後の昭和五四年末、

評判になつてゐた芙蓉台に土地が

あるといふのでK先生の車で現地

に連れて行つてもらつた。何箇所

六月十五日に旧軍隊施設を活用し

て、三島予科として開設された。

その後制度改革に伴い、三島教養

部、文理学部(三島)、国際関係

学部と四転し、その間短期大学部

商経科・家政科・工科(五十四年

廃止)・文科それに併設の付属三

島高等学校を加え、総合学園とな

つた。しかし、創設より根幹であ

つた文理学部(三島)は六十三年

三月をもつて廃止となつた。した

がつて三島学園は国際関係学部・

短期大学部・付属高等学校の三つ

で編成されている。

当初旧軍隊の兵舎跡であつたが、

やその他の集まりが出来たらよい

が、昭和五八年春建築にとりかか

り、その年の暮に、建坪四〇坪の

別宅が完成した。

しばらくそのままにしておいた

家を建てる時、学生諸君のゼミ

が、昭和五八年春建築にとりかか

り、その年の暮に、建坪四〇坪の

別宅が完成した。

高木、いや高く！

三島学園をふりかえつて

谷 口 富 男

(短期大学部文科長)

窓会会場として、集会してゐる。

三島学園が今日あるのは、創設

以来大学当局の理解および協力の

賜物によることは云うまでもない

が、開設以来学園づくりに献身さ

れた諸先生およびこの学園で学ん

だ多数の先輩各位、そして三島後

援会の方々のご支援、ご協力によ

る成果にはかならない。四十年余

の経過のうちには故人になられた

方々もあり、その歳月の流れの重

みを痛感する。

学園は自然環境に恵まれてゐる。

グランドに立つて、北を眺めると

靈峰富士山を見ることができる。

それは四季それぞれに装いを異に

する。東には箱根および天城の連

山を展望することができる。そし

てなによりも学園内にはいろいろ

な種類の樹木がある。桜・桜・銀

杏・つづじ・さつき等である。桜・

銀杏などは旧軍隊時代に植えられ

たそうだ。

開花は人の心に変化を与える。

私は三十三年に赴任して以来、毎年三月の末から四月にかけて咲く桜の花を眺めると心がおどる。この時期に新学期を迎えるのだから、学生たちに新鮮味を与えるに違いない。野生の桜とは異なるが、東京の大学の幾つかは、同窓の人達が大半、とあって、予想外に氣に入つた調度品を備えることができた。現在では、日本でも外の施設での交流でなく自宅での交流を深めてよい時代に入つてゐる。

そこで一つの提案をさせていた

だきたい。

個人の住んでゐる家で、その人

を評価するのは、今でもおかしい

ところである。

個人の住んでゐる家のせいにする

人が住んでゐる家の評価を、そ

の人が住んでゐる家のせいにする

なんて、本当にどうかしていると

思つた。

それから四年後の昭和五四年末、

評判になつてゐた芙蓉台に土地が

あるといふのでK先生の車で現地

に連れて行つてもらつた。何箇所

六月十五日に旧軍隊施設を活用し

て、三島予科として開設された。

その後制度改革に伴い、三島教養

部、文理学部(三島)、国際関係

学部と四転し、その間短期大学部

商経科・家政科・工科(五十四年

廃止)・文科それに併設の付属三

島高等学校を加え、総合学園とな

つた。しかし、創設より根幹であ

つた文理学部(三島)は六十三年

三月をもつて廃止となつた。した

がつて三島学園は国際関係学部・

短期大学部・付属高等学校の三つ

で編成されている。

桜林が二ヶ所ある。これらは、

「希望の森」・「思索の森」と呼ば

れている。「希望の森」の名付け

親は鶴沢義行教授(前通信教育部長・元副総長)、「思索の森」は沼

尻正隆教授(現文理学部長・副總

長)だが、かつて三島在職中に付

けられた。この希望の森に建つて

いる「希望の森」記念碑に

物には良くない。

桜林が二ヶ所ある。これらは、

「希望の森」・「思索の森」と呼ば

れている。「希望の森」の名付け

親は鶴沢義行教授(前通信教育部

長・元副総長)、「思索の森」は沼

尻正隆教授(現文理学部長・副總

長)だが、かつて三島在職中に付

けられた。この希望の森に建つて

いる「希望の森」記念碑に

高く、いや高く！

汝の夢、汝の希望を、

汝の志す理想を

高く、いや高く！

ということばが刻まれてゐる。

また「希望之像」や「思索之像」

など自然の森に相応しい像が建つ

てゐることはまことに自然環境と

人間との調和した理想的な学園で

ある。

戦後予科として開設された三島

学園が昭和時代の終りに四十年余

の歴史に幕を閉じ、国際関係学部

が新しい平成元年をもつて出発す

るような気持さえする。

平成元年二月十三日

幹	事	鈴木	稔	(27・28)	幹	事	栗山	康雄	(39)	幹	事	瀬村	隆治	(42・43)
幹	事	上野	実	(27・28)	幹	事	両角	勇	(42)	幹	事	吉田	力	(44・45)
幹	事	関本	文彦	(27・28)	幹	事	濱田	義之	(45)	幹	事	長倉	良幸	(44・45)
幹	事	真部	喜孝	(27・28)	幹	事	高藤	省三	(49)	幹	事	前山	良光	(45・46)
幹	事	結城	勇一	(27・28)	幹	事	河田	敏明	(50)	幹	事	早川	清文	(45・46)
幹	事	高田	全司	(27・28)	幹	事	滝本	博	(53)	幹	事	菅野	利幸	(45・46)
幹	事	丸山	富美雄	(28)						幹	事	三枝	和彦	(46・47)
幹	事	小椋	貞夫	(28・29)	幹	事	岩崎	尚枝	(41・42)	幹	事	天野	寿一	(48・49)
幹	事	坂詰	正衛	(28・29)	幹	事	小永井	京子	(43・44)	幹	事	塙村	光伸	(53・54)
幹	事	鈴木	義樹	(28・29)	幹	事	平岩	美知子	(44・45)					
幹	事	望月	知林	(28・29)	幹	事	高橋	真理子	(44・45)	幹	事	中山	義昭	(41・42)
幹	事	安東	安生	(29・30)	幹	事	加藤	和代	(46・47)	幹	事	渡辺	清	(42・43)
幹	事	田嶋	文義	(29・30)	幹	事	石井	千枝子	(46・47)	幹	事	赤地	哲也	(42・43)
幹	事	寺崎	哲郎	(29・30)	幹	事	古川	幾代	(56・57)	幹	事	深井	富雄	(45・46)
幹	事	関	哲男	(29・30)	幹	事	佐野	裕子	(58・59)	幹	事	河田	哲雄	(46・47)
幹	事	林田	達郎	(29・30)	幹	事	田島	由合子	(59・60)	幹	事	西家	勝彦	(51・52)
幹	事	森	伸夫	(30・31)	幹	事	清水	美希	(59・60)	幹	事	勝呂	千明	(52・53)
幹	事	道見	俊廣	(30・31)	幹	事	佐藤	明美	(61・62)					
幹	事	小野	武	(30・31)						幹	事	今関	邦彦	(26・27)
幹	事	杉山	茂	(30・31)	幹	事	荒木	とよ子 (飯村)	(39・40)	幹	事	横山	栄蔵	(28・29)
幹	事	根岸	元宏	(31・32)	幹	事	萩野谷	肇	(41・42)	幹	事	加藤	晴俊	(30・31)
幹	事	加藤	三洲	(31・32)	幹	事	上田	定義	(41・42)	幹	事	山口	良児	(43・44)
幹	事	渡部	浩司	(31・32)	幹	事	加藤	久貴	(46・47)	幹	事	岩崎	一雄	(43・44)
幹	事	金沢	定徳	(32)	幹	事	秋山	稔明	(46・47)	幹	事	加藤	博昭	(48・49)
幹	事	大村	日出雄	(32)	幹	事	前田	正丈	(47・48)	幹	事	津田	正克	(50・51)
幹	事	甲田	知由	(33)	幹	事	藤本	哲生	(47・48)	幹	事	後藤	善夫	(52・53)
幹	事	杉本	直志	(33)	幹	事	野田	栄	(47・48)	幹	事	西島	みゆき (今井)	(52・53)
幹	事	市橋	悟	(34)	幹	事	棚橋	敏彦	(50・51)					
幹	事	朴沢	英憲	(34・35)	幹	事	小松	真由美	(51・52)	幹	事	遠藤	日出夫	(37)
幹	事	吉野	洋一	(35)	幹	事	矢崎	真治	(53・54)	幹	事	渡辺	博夫	(37)
幹	事	横田	晋朗	(35)						幹	事	江川	洋	(42)
幹	事	鈴木	肇	(35)	幹	事	松嶋	絹江	(54・55)	幹	事	藤幡	俊量	(47)
幹	事	御供	政紀	(35・36)	幹	事	大石	多佳子	(57・58)					
幹	事	小沢	文郎	(36)	幹	事	渡辺	桂子	(60・61)	幹	事	松原	裕二	(54~57)
幹	事	大西	良雄	(37)	幹	事	片村	則子	(61・62)	幹	事	賀川	晶子	(54~57)
幹	事	小川	武司	(37)	幹	事	日吉	みちよ	(61・62)	幹	事	山本	ゆか	(58~61)
幹	事	多田	清太郎	(37)	幹	事	角田	由美	(62・63)	幹	事	後藤	幸江	(58~61)
幹	事	坂口	正剛	(37)	幹	事	林	尚美	(62・63)					
幹	事	小石川	宣照	(37)										
幹	事	谷崎	邦昭	(38)	幹	事	宮下	正俊	(39・40)					

平成元年度役員

(昭和63. 11. 3 改選)

顧問	西村 満男	(21~23)	常任幹事	江本 博勝	(46・47)	幹事	徳増 清二	(23~25)
顧問	西村美枝子 (長谷川)	(22~24)	常任幹事	宮川 守	(47・48)	幹事	石野 進	(23~25)
			常任幹事	沼上 博美 (伊出)	(48・49)	幹事	石垣 恭弘	(23~25)
会長	中嶋 信行	(23~25)	常任幹事	関野 幹雄	(48・49)	幹事	井上 忠彦	(23~25)
			常任幹事	大島 裕二	(52・53)	幹事	細田 昭次	(23~25)
副会長	宮沢 主計	(25・26)	常任幹事	斎藤 聰	(54~57)	幹事	杉山 吉房	(23~25)
副会長	渡辺 勝一	(26・27)	常任幹事	小沢里佳子	(57・58)	幹事	深沢 昭八	(23~25)
副会長	見上 勇逸	(27・28)				幹事	服部 房夫	(23~25)
副会長	中茎 幸治	(31・32)	会計監査	持田 光雄	(32・33)	幹事	芦澤 克治	(24~25)
副会長	平井 千枝	(34・35)	会計監査	中島 敏男	(30・31)	幹事	石川 進	(25・26)
副会長	高田 菊平	(36)				幹事	矢沢 知秋	(25・26)
副会長	山田 浩子	(41・42)	幹事	高田日出太郎	(21)	幹事	長倉 祐作	(25・26)
副会長	宮下 公雄	(54~57)	幹事	馬場 康夫	(21・22)	幹事	宮崎 茂樹	(25・26)
			幹事	中野 繁	(21~23)	幹事	白鳥 義仁	(25・26)
事務局長	角田 義廣	(30・31)	幹事	石垣 義親	(21~23)	幹事	伊藤 悟	(25・26)
			幹事	石川 三雄	(21~23)	幹事	辻 省二	(26・27)
常任幹事 (庶務担当)	久保田 勝	(38・39)	幹事	小野 真一	(21~23)	幹事	田村 実	(26・27)
常任幹事 (庶務担当)	佐野 勝己	(39・40)	幹事	米内 国夫	(21~23)	幹事	吉田 敏雄	(26・27)
常任幹事 (会計担当)	土屋 忠得	(40・41)	幹事	澤 直和	(21~23)	幹事	浅原 好胤	(26・27)
常任幹事	小林 栄三	(23~25)	幹事	滝川 昇	(22・23)	幹事	宮崎 乾朗	(26・27)
常任幹事	大井 徹也	(26・27)	幹事	秋山 正幸	(22~24)	幹事	高橋 英明	(26・27)
常任幹事	鈴木 邦良	(27・28)	幹事	中浜 卓弥	(22~24)	幹事	荒川 通	(26・27)
常任幹事	市川 紀子	(37・38)	幹事	中塙 利雄	(22~24)	幹事	岩永 勉	(26・27)
常任幹事	小出 博	(40・41)	幹事	北條 晃	(22~24)	幹事	塩田 浩	(26・27)
常任幹事	柴田 正	(41・42)	幹事	長田 渉	(22~24)	幹事	村野 静司	(26・27)
常任幹事	土屋 貞明	(42・43)	幹事	山内 茂	(22~24)	幹事	光信 優	(26・27)
常任幹事	小早川隆義	(42・43)	幹事	川口 正信	(22~24)	幹事	稻葉 昭	(26・27)
常任幹事	染谷 徳昭	(42・43)	幹事	小林 昭雄	(22~24)	幹事	吉田 昭二	(26・27)
常任幹事	田中 由雄	(42・43)	幹事	金田 豊	(23~25)	幹事	熊崎 文二	(26・27)
常任幹事	渡辺 忠昭	(42・43)	幹事	松本 秀雄	(23~25)	幹事	輿水 啓一	(26・27)
常任幹事	林田 孝二	(43)	幹事	木村 幸夫	(23~25)	幹事	廣田 均	(26・27)
常任幹事	相田 信次	(44・45)	幹事	勝俣 敏充	(23~25)	幹事	栗原 恒夫	(26・27)
常任幹事	鈴木 正八	(44・45)	幹事	山本 安博	(23~25)	幹事	黒瀧 祐司	(27・28)
常任幹事	山崎 光義	(44・45)	幹事	森下 菊美	(23~25)	幹事	小林 義尚	(27・28)
常任幹事	久保田博明	(45・46)	幹事	宝地 克哉	(23~25)	幹事	佐藤 力男	(27・28)
常任幹事	榎本 瞳美	(45・46)	幹事	播本 弘	(23~25)	幹事	田村 栄一	(27・28)
常任幹事	西野 和衛 (望月)	(46・47)	幹事	長谷川駿一	(23~25)	幹事	宮澤 基人	(27・28)

昭和62年度 事業 報 告

1. 三島同窓会長賞授与並びに奨学金の給付

昭和62年度日本大学三島学園在学生から、次の者が推薦された。短大関係は同窓会長賞を贈り、昭和63年3月25日の卒業式当日（日本武道館）、国際・学部教養課程は奨学金を贈り、4月9日の国際関係学部開講式当日それぞれ授与式が行われた。

同窓会長賞	2名	日吉みちよ（家政科食物栄養専攻）	土佐谷恭子（商経科二部）
奨 学 金	4名	山田 竜作（国際関係学科）	土田 洋二（国際関係学科）
		桑原 健治（国際文化学科）	中村由美子（商学部商業学科）

1. 学園歌集発行

2,500部を発行し、昭和63年4月国際関係学部・短期大学部各科および法学部の新入生全員に対し、入学祝いとして渡した。

1. 会報発行

会報17号、昭和62年6月12日発行	12頁 3,000部
会報18号、昭和63年2月15日発行	8頁 3,000部

1. 各科同窓会等補助

- (1) 桜文会・桜栄会の改訂版名簿が発行され、発行費の一部を補助した。分冊として、教養2期の名簿を同窓会負担で発行した。
- (2) 体育奨励会に対し、大学体育団体育成を目的に、105,000円を補助した。

1. 幹事会

昭和62年6月12日(金)18時30分から、日本大学三島学園8号館2階で開催した。

1. 常任幹事会

昭和62年11月3日(火)14時から日本大学三島学園本館小会議室において開催した。

1. 総会並びに懇親会

昭和62年11月3日(火)16時から、総会並びに懇親会を日本大学三島学園記念館で開催した。

昭和62年度 収 支 決 算 書

(昭和62年4月1日～昭和63年3月31日)

(単位：円)

支 出 の 部				収 入 の 部			
項 目	予 算 額	決 算 額	差 異	項 目	予 算 額	決 算 額	差 異
奨 学 費	260,000	204,930	55,070	会 費 収 入	2,173,000	2,180,000	△ 7,000
学 園 歌 集 発 行 費	230,000	245,000	△ 15,000	雜 収 入	829,784	897,799	△ 68,015
同 窓 会 報 発 行 費	350,000	370,000	△ 20,000	前 受 金 収 入	900,000	803,000	97,000
各 科 同 窓 会 等 補 助	1,730,000	1,140,077	589,923				
総 会 並 び に 懇 親 会 費	420,000	345,120	74,880				
会 議 会 合 費	250,000	248,220	1,780				
通 信 運 搬 費	50,000	14,600	35,400				
事 務 費	530,000	110,700	419,240				
雜 費	300,000	75,400	224,600				
予 備 費	200,000	0	200,000				
計	4,320,000	2,754,047	1,565,893	計	3,902,784	3,880,799	21,985
基 金 繰 入 額	0	320,000	△ 320,000	基 金 繰 出 額	1,250,000	0	1,250,000
次 年 度 繰 越 金	900,000	873,968	26,092	前 年 度 繰 越 金	67,216	67,216	0
前 受 金	900,000	803,000	97,000				
繰 越 金	0	70,968	△ 70,908				
合 計	5,220,000	3,948,015	1,271,985	合 計	5,220,000	3,948,015	1,271,985

貸 借 対 照 表

(昭和63年3月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普 通 預 金	1,273,968	基 前 年 度 繰 越 金	18,900,000
知 預 金	1,000,000	前 年 度 繰 入 額	18,580,000
定 期 預 金	17,500,000	本 年 度 繰 入 額	320,000
		次 年 度 繰 越 金	873,968
		前 年 度 繰 越 金	803,000
		前 年 度 繰 入 額	70,968
合 計	19,773,968	合 計	19,773,968

昭和62年度收支について、関係帳簿並びに証憑書類を精査いたしましたが、記帳その他正確であることを認めます。

昭和63年5月18日

会計監査 中 島 敏 男 ◎

同 持 田 光 雄 ◎

昭和63年度 事業計画

1. 三島同窓会長賞授与

日本大学国際関係学部・および短期大学部を、昭和64年3月進級・卒業予定の者を対象とする。

国際関係学部……………各学科3・4年生 各1名宛 同窓会長賞

短期大学部……………各科 1名宛 奨学金

1. 三島同窓会学生表彰規定の件

1. 学園歌集発行予定

2,500部を発行し、昭和64年4月国際関係学部・短期大学部各科および法学部の新入生全員に対し、入学祝いとして渡す。

1. 会報発行予定

会報19号（昭和63年6月）発行 8頁 3,000部

会報20号（昭和64年2月）発行 8頁 3,000部

1. 各科同窓会等補助

(1) 各科の名簿編集の推進。

(2) 体育奨励会に対する補助。

1. 日本大学100周年記念に係わる事業

1. 三島開設50周年記念に係わる事業

(1) 準備委員の選出

(2) 準備委員会（第1回）の報告

1. 三島同窓会維持会費の件

1. 日本大学校友会加盟の件

1. 幹事会

(1) 昭和63年5月18日(木)18時30分から日本大学国際関係学部8号館2階において開催する。

(2) 本年度は6月22日(水)に第2回目の幹事会も開催予定。

1. 総会並びに懇親会

昭和63年11月3日(木)16時から日本大学国際関係学部記念館で開催する。

昭和63年度 収支予算書

(昭和63年4月1日～昭和64年3月31日)

(単位：円)

支出の部				収入の部			
項目	本年度予算額	前年度予算額	増減(△)	項目	本年度予算額	前年度予算額	増減(△)
奨学費	160,000	260,000	△ 100,000	会費収入	1,274,000	2,173,000	△ 899,000
学園歌集発行費	250,000	230,000	20,000	雑収入	655,032	829,784	△ 174,752
同窓会報発行費	510,000	350,000	160,000	前受金収入	900,000	900,000	△ 0
各科同窓会等補助	760,000	1,730,000	△ 970,000				
総会並びに懇親会費	420,000	420,000	0				
会議会合費	350,000	250,000	100,000				
通信運搬費	50,000	50,000	0				
事務費	200,000	530,000	△ 330,000				
雜費	300,000	300,000	0				
予備費	200,000	200,000	0				
計	3,200,000	4,320,000	△1,120,000	計	2,829,032	3,902,784	△1,073,752
基金繰入額	0	0	0	基金繰出額	1,200,000	1,250,000	△ 50,000
次年度繰越金	900,000	900,000	0	前年度繰越金	70,968	67,216	3,752
前受金	900,000	900,000	0				
繰越金	0	0	0				
合計	4,100,000	5,220,000	△1,120,000	合計	4,100,000	5,200,000	△1,120,000

